

平成30年7月31日(火)

老球の細道428号

7月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「夏は暑い、冬は寒い、蚊に刺されればかゆい、ただそれだけである」。あたりまえのことを口に出して騒ぐなということ戒めるときに良く使っていた警句だが、そんな悠長なことを言ってもらえないとんでもない猛暑が連日続く。日本中熱中症パニックの中、脳みそが熱中症になるくらい頭を使った練習をしているチームはどのくらいあるのだろうか。

1・映画から

◆「我らには前進あるのみ 幾度もの失敗を踏み台にして さらなる高みを目指せ」〈韓国映画『密偵』〉

1920年代の日本統治下の朝鮮半島を舞台にしたスパイサスペンス映画。日本政府に対して爆弾テロを計画する組織が密偵により計画が失敗する映画である。バスケットボールの試合で、身近なチームがもう一息で負けてしまった場面とだぶってしまった。

2・読書から

◆「ものごとの衰えるきざしは、最も盛んで隆々たるときすぐにもう始まり、新しい芽生えのはたらきは、葉の落ちつくしたとき早速に起きているものである」〈『菜根譚・117』岩波文庫〉

バスケットボールのゲームの流れのようである。チャンスはピンチの始まり、ピンチはチャンスの始まり。現状に一喜一憂せず、先の先を見ながら波乱万丈を楽しむ。

◆「答えは教えるものではなく、見つけてもらうもの。自分で考えて失敗することでしか学びは得られない。できたか否かをはっきりとわかるような形で伝えるのが指導者の最大の役割であり、どうすれば良いかを考えることこそが、子どもたちの役割である」〈『コーチングクリニック』2018・7月〉

幼児期の3つのスポーツ教育指針の一つである。教え過ぎが嵩じて自分でものを考えない、自分の考えを言えない子どもが多い。その兆しは幼児期から始まっていると言われる。私の孫は自分中心で、自分のことばかり言いすぎて困っている。爺婆教育の弊害か。

3・新聞のコラム等から

◆「MAN errs so long as he strives (ゲーテ)・人は過ちを犯す。努力しているからだ」〈朝日・声〉

ミスを恐れる子どもたちに言い聞かせたい。未知なること、難しいことへチャレンジして失敗し、そしてまたチャレンジ。その繰り返しの中で成長する。人生の原理原則である。

◆「強さではなく優しさで、恐怖心ではなく誇りで、人を動かさなさい (ジョン・ウッデン)」〈朝日・折々のことば〉

選手たちにまずは敬意を払うこと。それによって彼らは優しさと誇りを内に感じ、チームのために努力を惜しまなくなると名将は言う。アレン・アイバーソンを動かしたジョン・トンプソン、幕末の英雄を動かした吉田松陰は皆同じタイプの指導者であった。

◆「いい子だからかわいがるのではなく、かわいがらいい子になるのです」〈朝日・本広告・佐々木正美著『子どもの育てかた』〉

コーチは子ども好きからすべてが始まる。かわいがっているうちに望む選手に育つ。